

氏 名	みやはら ゆきこ 宮原 佑貴子
学位(専攻分野)	博 士 ( 学 術 )
学 位 番 号	博甲第 1049 号
学位授与の日付	令和 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専 攻	工芸科学研究科 デザイン学専攻
学 位 論 文 題 目	地域コミュニティにおける象徴的造形の生成と活用に関する研究 - ご当地キャラクターから考察する生成過程理論 -
審 査 委 員	(主査)教授 櫛 勝彦 教授 中野仁人 教授 池側隆之

### 論文内容の要旨

2010 年前後に全国的ブームとなり、各地で盛んに作られたご当地キャラクターは、現在では一時の勢いを失い、各組織での活動再検討の動向が見られるようになってきた。本論は、ご当地キャラクターを、単なる流行ではなく、時代変遷のなかで必然的に出現した現代の「地域コミュニティにおける象徴的造形」と位置づけ、キャラクター生成の具体事例の収集と分析から、コミュニティと造形の一般性を有する関係理論を導き出そうとするものである。

第 1 章は、日本における紋章発生とそれらの地域象徴への変化を振り返り、それらと、架空存在を図像化して親しむ古来の文化との融合が、日本独特のご当地キャラクター発生と受容の背景となったことを述べ、第 2 章では、戦後の国体でのマスコットキャラクターを底流に、地方分権一括法（1999 年）を契機とした地方価値の再認識が、ご当地キャラクターを生み、その後のメディア露出、図鑑等出版、大型イベント開催といった一連の社会現象の概況を確認している。第 3 章は、全国のご当地キャラクター運営組織を対象に実施したアンケート調査（回答数：104 件、回答率：49.5%）より、生成過程、生成目的、効果に関する項目を抽出し、地域外への効果を期待する「対外的生成目的型」と、地域内への効果を期待する「対内的生成目的型」として分類し、数量化理論 III 類とクラスター分析によって、それぞれの生成過程の特徴を割り出し、さらに重回帰分析を用いて生成目的の達成効果に影響を与える生成過程要素を、前者では「組織内トップからの指示」、後者では「職員による投票」であることを明らかにした。第 4 章は、第 3 章の結果の、キャラクター生成・運営の現場での文脈的理解を目的に、対外的生成目的型、対内的生成目的型に属するそれぞれ 4 組（計 8 組）の運営組織へのインタビュー調査を行い、発話データを修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析した。分析結果として、組織内外の目的や意図、過程と行動の意味を含む活動フローを表現するカテゴリーサンプル図を目的別に制作し、前章量的分析結果の意味を深く理解するとともに、キャラクター生成・活用のための理論的構造を明示した。第 5 章では、その検証を目的に、4 章調査対象の全運営組織へ、相関図に関する意見聴取を行い、その妥当性を確認した。また、発話データのテキストマイニングから、互いに自らとは逆の活動への接続を示唆するキーワード出現を確認できたことから、2 つの相関図は無関

係に独立したものではなく連続性のある一体的なものと理解し、円環を成す総合的相関図を作成し、「地域コミュニティにおける象徴的造形」の生成・活用理論として提示した。

## 論文審査の結果の要旨

「ゆるキャラ」として親しまれてきたご当地キャラクターは、政府の地方支援の施策もあり、1つのイベントに 1700 体以上のキャラクターが参加するほど、異常な盛り上がりを見せた。地元産品の販売促進や知名度向上、郷土愛の掘り起こしなど、ご当地キャラクターは地域なりの想いが込められる機会であったと考えられるが、「ひこにゃん」「くまモン」に代表される成功事例に倣った横一線の活動は、個々を埋没させ、人々の関心が離れる結果を招いたとも考えられる。多くのキャラクター生成が、自治体あるいはその関連団体によるものであることから、そのプロセスには、公募や投票といった市民参加の手順が含まれる例が多いが、プロに委ねた地域ブランディングの一環としてのものもあり、ご当地キャラクターを一括りで理解することは、実は難しい。申請者は、地元コミュニティの一員として、キャラクターの制作、運営に携わった経験から、自治体、商工会、ボランティア、一般市民といった多様なステークホルダーが絡む活動の難しさを実感しつつ、それ故の意義と可能性を強く感じ、それが本研究の動機となっている。本論中心部分の第 1 段階では、全国のキャラクター制作の概況を把握するため、運営団体へのアンケート調査を行い、団体特性、当初目的、生成手法、デザイン決定手順、効果度合いなどの回答を、複数の量的解析手法を重ねながら、対外的と対内的といった目的別に有効な生成過程項目を発見している。その結果は、対外目的の「組織内トップの指示」、対内目的の「職員による投票」といった意外性を含むものであり、それを反映した目的別に有効な生成過程モデルを理論的に提示できたことは評価に値する。この内容は、以下の論文 1 で発表し、本論 3 章でまとめられている。しかし、解析で得た理論モデルは、現場の具体的な事実とは切り離されていることから、その有効性への実感が伴わない。そこで、第 2 段階では、アンケートに協力した団体群から、対外的、対内的に分類できる例を選定し、インタビューによって、その生成と活用の実態・経験を発話として収集し、M-GTA による丹念な質的分析から、理論モデルを意味・概念的に肉付けしたフロー図（カテゴリ一相関図）として導き出している。この内容は、論文 2 で発表し、本論 4 章部分を構成している。さらに、この結果の検証目的に上記団体への再インタビューを行い、その発話のテキストマイニングから、2 つの相関図の統合による包括的フローを提示しており、これは、ご当地キャラクターに留まらない地域コミュニティにおける象徴造形形成のプロセス指標として捉えることが可能である。異なる調査手法、解析手法を巧みに重ね合わせ、経験と理論、概念と事実の間を行き来しながらのプロセスに本論の特徴があり、そこから得られた結果が、実践性と一般性を兼ね備えるものであることは、高く評価できる。

以下は、査読付き学術学会誌での掲載状況である。

1. 宮原佑貴子, 櫛勝彦, 鳥宮尚道「地域コミュニティにおける象徴的造形の生成過程についての研究 -ご当地キャラクターを事例とした生成過程の調査と分析」日本デザイン学会, デザイン学研究 Vol.67, No.4 第 67, pp.69-78, 2021
2. 宮原佑貴子, 畑柳加奈子, 櫛勝彦「地域コミュニティにおける象徴的造形の生成と活用に関する

る理論構築－地域内外の生成目的を持つご当地キャラクターを事例として」日本デザイン学会、デザイン学研究 Vol.68, No.4 掲載予定（採択日：2021年11月10日）